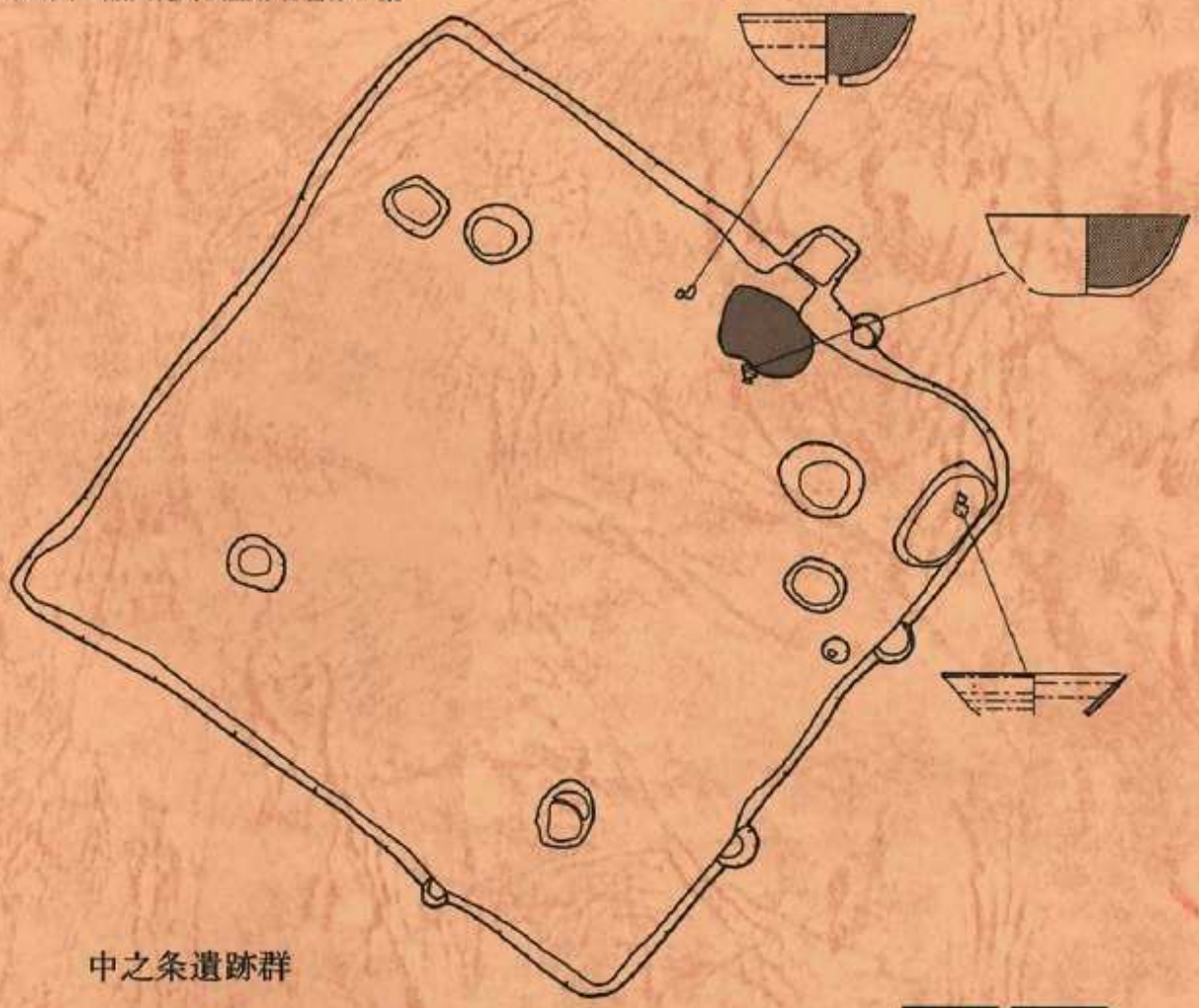
坂城町埋蔵文化財調査報告書第７集



中之条遺跡群

上町遺跡II

長野県埴科郡坂城町住宅団地造成事業発掘調査報告書

NAKANOJYO SITES UWAMACHI SITE

1996

坂城町土地開発公社
坂城町教育委員会

坂城町埋蔵文化財発掘調査報告書第７集

中之条遺跡群

上町遺跡 II

長野県埴科郡坂城町住宅団地造成事業発掘調査報告書

NAKANOJYO SITES UWAMACHI SITE

1996

坂城町土地開発公社
坂城町教育委員会

序

町住宅団地造成事業に伴う中之条遺跡群上町遺跡Ⅱの埋蔵文化財発掘調査は、平成6年度に実施されました。

調査の結果、遺構は竪穴住居址2棟(奈良・平安時代)、掘立柱建物址1棟(中世?)等が発掘されました。また遺物としては、縄文土器、土師器、須恵器等が出土しました。

これらの調査結果から、他の中之条遺跡群の発掘調査結果を総合的に考察することで、この地域の当時の生活を知る貴重な資料を得ることができました。

発掘の途上、近隣の方々には、大変なご協力をいただきまして、心からお礼申し上げます。

本調査にあたり森嶋稔先生には、終始温かいご指導をいただき感謝と敬意の他ありません。

さらに長野県教育委員会はじめ快く作業に協力してくださった皆様方に、感謝を申し上げ序にかえる次第であります。

坂城町教育委員会
教育長　西沢民雄

例言

1　本書は長野県埴科郡坂城町住宅団地造成に伴う上町遺跡Ⅱの発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、坂城町土地開発公社から委託をうけた坂城町教育委員会が実施した。

3　調査期間　平成6年11月16日～12月22日

　整理期間　平成8年2月1日～3月7日

4　本報告書の執筆・編集は小平が行った。

5　本遺跡の調査における出土遺物、実測図等は坂城町教育委員会が保管している。

6　本報告書作成にあたって下記の方々、機関からご助言・ご指導を賜った。記して厚く御礼申し上げる次第である。（50音順・敬称略）

尾見智志　川上　元　小平和夫　草川泰弘　百瀬新治

山岡邦彦　和根崎　剛

㈱更埴広域シルバー人材センター

長野県教育委員会文化課

凡例

1　遺構名は時代別でなく、通し番号である。遺構の略称は以下の通りである。

H→竪穴住居址　　F→掘立柱建物址　　D→土坑址

P→ピット　　S→石

2　挿図の縮尺は以下の通りである。

竪穴住居址・掘立柱建物址・土坑址→1：80

住居址カマド→1：40　土器→1：2　1：4

石器→1：1

3　挿図のスクリーントーンは以下を示す。

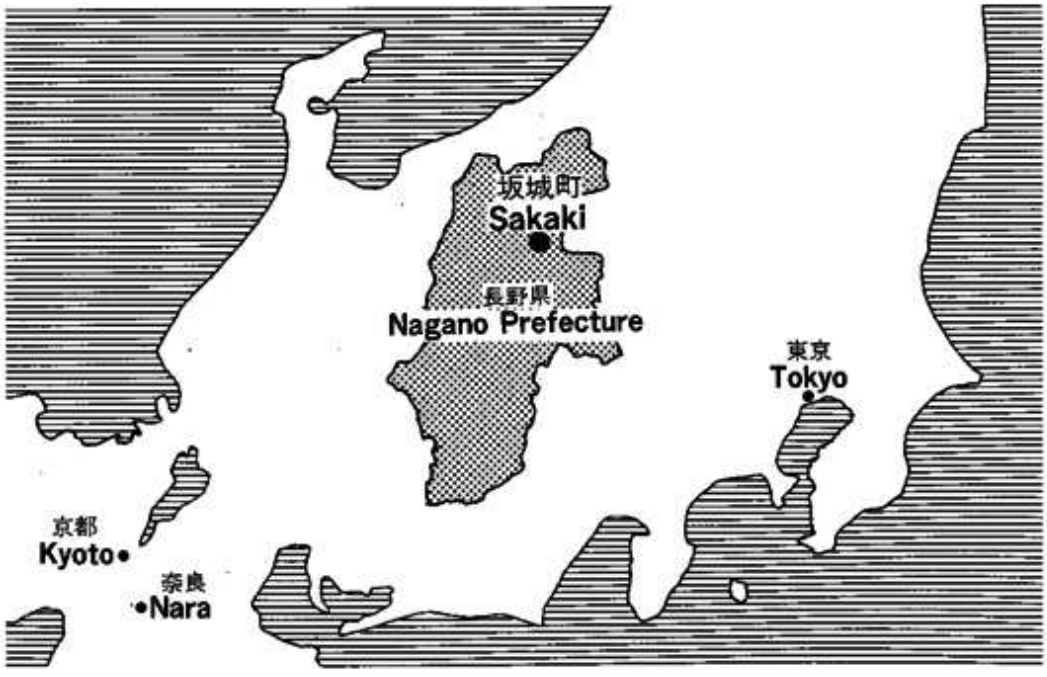
遺構　遺構構築土　　焼土

遺物　縄文土器断面

土師器黒色処理・須恵器断面

4　土層の色調は『新版　標準土色帖』の標記に基づいて示した。

5　遺跡面積の計測には、プラニックスセブンを用い、3回の計測の平均値を面積として示した。



第1図　長野県位置図

中之条遺跡群　上町遺跡 II　CONTENTS

序
例言・凡例
目次

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第１節　調査に至る経緯――1
第２節　調査の方法――2

第Ⅱ章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境――4
第２節　歴史的環境――5

第Ⅲ章　上町遺跡

第１節　調査概要――8
1　遺跡の立地と概要――8
2　基本層序――9
3　調査日誌――9
第２節　遺構と遺物――10
1　竪穴住居址――10
1）Ｈ１号住居址――10
2）Ｈ２号住居址――10
2　掘立柱建物址――12
1）Ｆ１号掘立柱建物址――12
3　土坑址――13
1）Ｄ１号土坑址――13
2）Ｄ２号土坑址――13
3）Ｄ３号土坑址――14
4）Ｄ４号土坑址――14
5）Ｄ５号土坑址――14
6）Ｄ６号土坑址――14
7）Ｄ７号土坑址――14
8）Ｄ８号土坑址――14
9）Ｄ９号土坑址――15
4　遺構外出土遺物――15
第３節　写真図版――18

第Ⅳ章　成果と課題

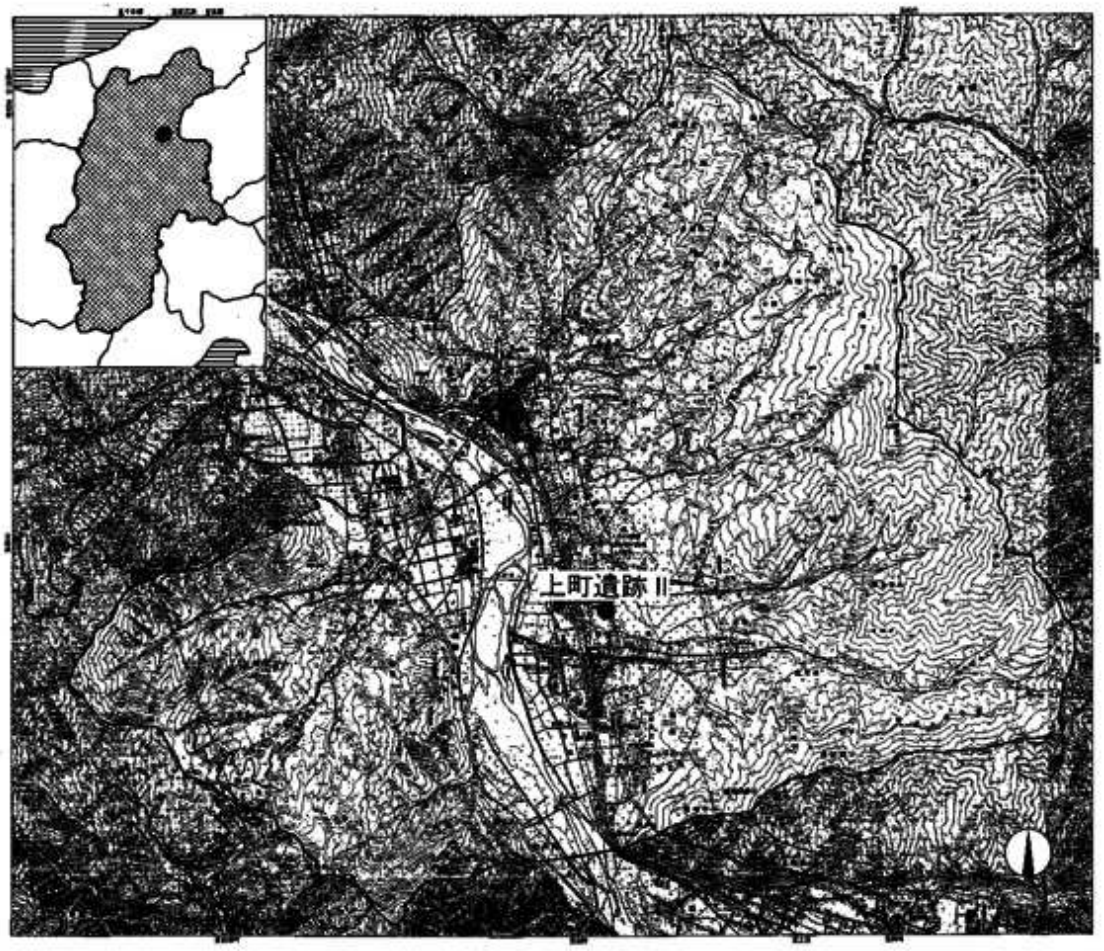
第１節　縄文時代――21
第２節　古　　代――21

調査体制

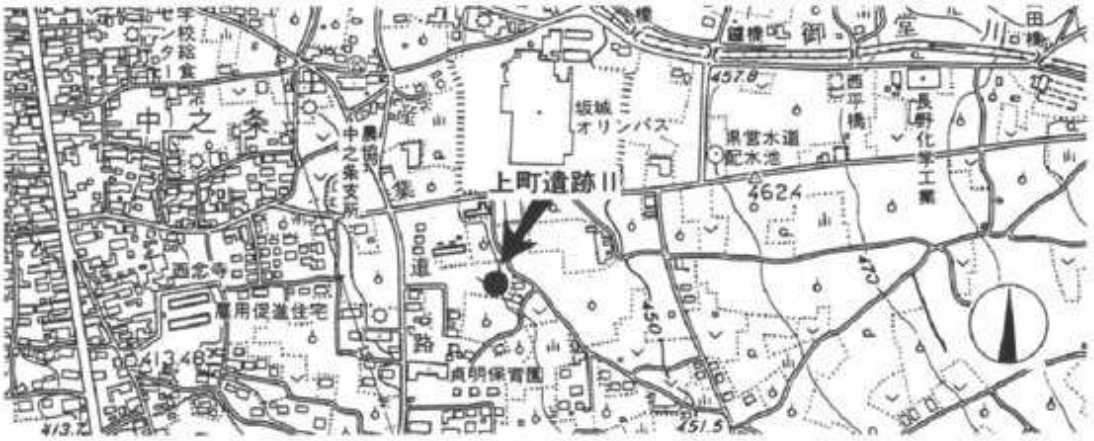
第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第1節　調査に至る経緯

長野県埴科郡坂城町は、昭和30年埴科郡坂城町・中之条村・南条村が行政合併して発足した。その後昭和35年に更級郡村上村が編入合併し現在に到る。地理的には長野市を中心とした北信地方と上田市を中心とした東信地方との接点にあたり、北側を更埴市・埴科郡戸倉町・更級郡上山田町、東側を小県郡真田町、西側、南側を上田市とそれぞれ接している（第2図）。面積は53.64㎢で約1万6,900人の人口がある。町内の350を超える事業所の製造品出荷額等は1,400億円を超え、県内町村のトップであり、国内でも特異な田園工業都市である。



第2図　長野県埴科郡坂城町位置図



第３図　上町遺跡Ⅱ位置図（１：10,000）

今回、大字中之条字上町（うわまち）において坂城町土地開発公社による住宅団地造成事業が計画され、周知の遺跡内であることから、長野県教育委員会文化課・坂城町土地開発公社・地元研究者森嶋稔氏・坂城町教育委員会の４者による保護協議の結果、遺跡範囲を確認するため平成６年11月16日～22日試掘調査を実施した。

５本の試掘トレンチを入れ遺構の有無を確認したところ、竪穴住居址・掘立柱建物址等の遺構、縄文土器・土師器・須恵器等の遺物が検出された。

そこで再度の保護協議の結果、遺構の確認された1,116㎡の範囲について記録保存を実施することとなった。

発掘調査は、坂城町土地開発公社より委託をうけた坂城町教育委員会が主体となり調査を実施した。

上町遺跡Ⅱ調査前（西より撮影）

引用・参考文献　坂城町『坂城町40周年町勢要覧1995』平成７年

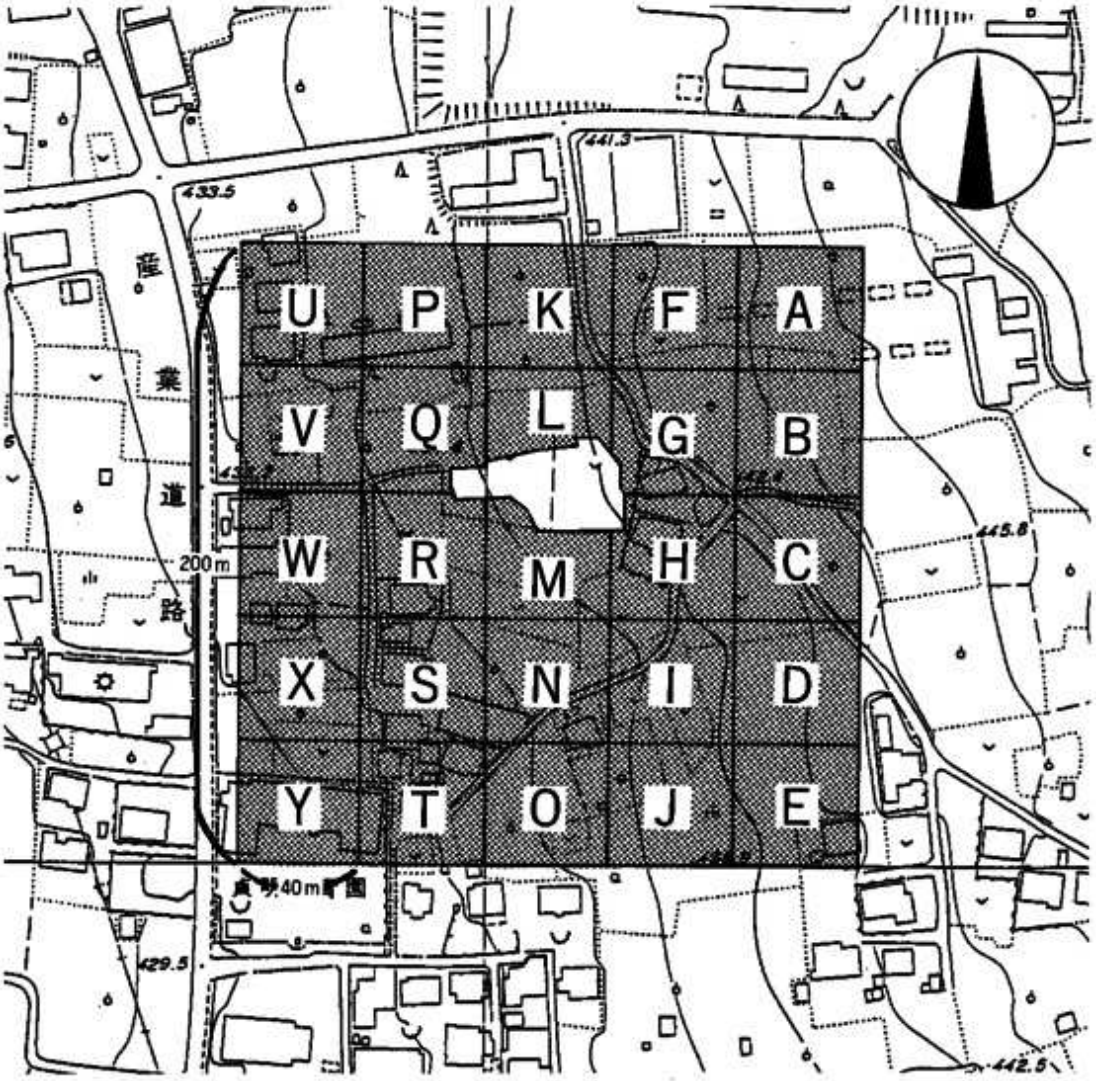
第２節　調査の方法

遺構の検出にあたっては、重機によって表土を除去した後、人力によって遺構確認面の精査及び遺構の掘り下げを行い、簡易造り方実測で図化し、遺構・遺物の測量、写真撮影、遺物の取り上げを行った。

遺構・遺物の測量には正確な位置が記録でき、調査区北側に隣接する上町遺跡（平成６年調査）と

整合できるⅧ系国家座標軸を基にグリッドを組んだ(第４図)。グリッド設定にあたっては調査対象地区を東西200ｍ、南北200ｍの正方形区画したものを大グリッドと設定し、その中を40ｍ×40ｍの中グリッドで25分割し、北東隅より北から南にＡ・Ｂ・Ｃ～Ｙ区とアルファベットの大文字で記号化した。さらにその中を４ｍ×４ｍのグリッドで100分割し、東西列を東より五十音順であ・い・う～こ、南北列を北より算用数字で１・２・３～10とし、各グリッドの北東交点を小グリッドとし、遺構検出位置・遺構外出土遺物の取り上げはすべてこれに換った。

引用・参考文献　佐久市教育委員会・佐久埋蔵文化財センター『金井城跡』平成２年



第４図　上町遺跡Ⅱ調査区設定図（１：2,500）

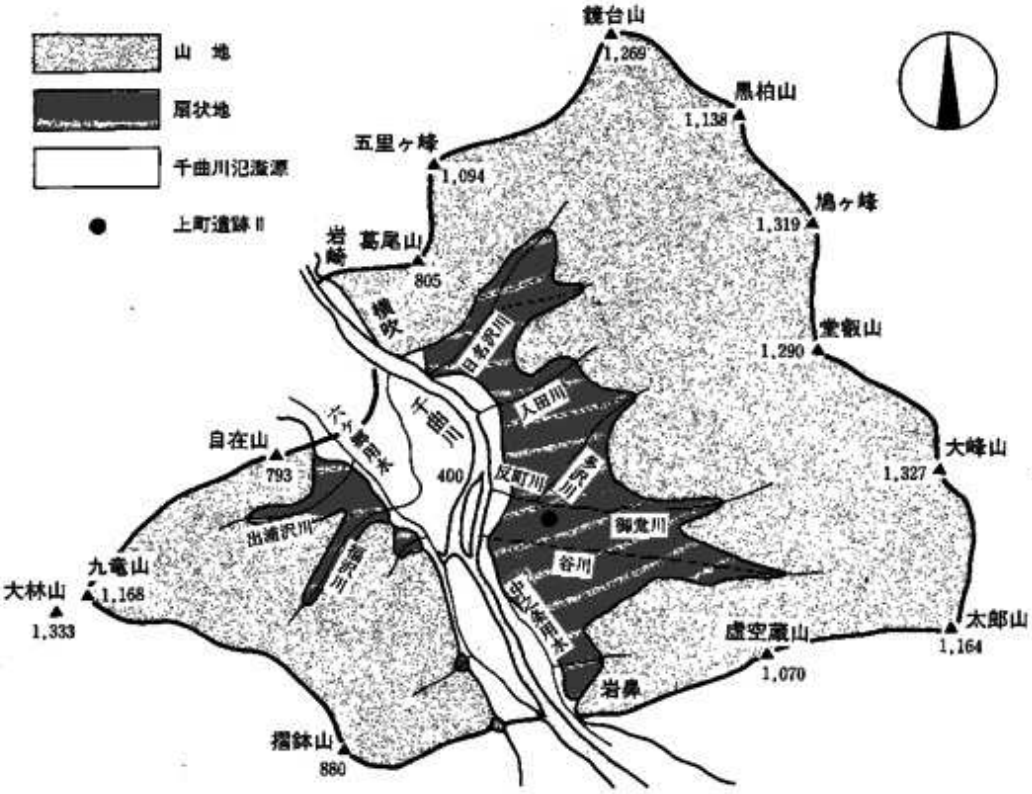
第Ⅱ章　遺跡をとりまく環境

第１節　地理的環境

更埴地方最南部に位置する坂城町は、町の中央を北流する千曲川によって、坂城広谷と呼ばれる貫通谷を形成している(第５図)。

千曲川左岸は、出浦沢川・福沢川等に形成された小複合扇状地と千曲川の断層崖でなり、断層崖は急崖で泥岩・玢岩の崩落があり、現在も交通の障害となっている。

逆に右岸は、北側の横吹・南側の岩鼻の断崖、西側の千曲川河床によって制約され、他の地域との交通の障害となるが、日名沢川、入田川・御堂川・谷川等によって形成された複合扇状地は、更埴地方南部で最も開かれた洪積台地をなしている。扇状地の扇端部は段丘崖となり、千曲川沿いの沖積地に到り、微高地上を太平洋側と日本海側を結ぶ国道18号線・ＪＲ信越本線が通じている。



第５図　坂城町地形概念図

気候は年間通じて降水量が少なく晴天の日が多い内陸性気候で、過去10年間の平均降水量はおよそ800㎜。日本で最も雨量の少ない地域の一つである。年間通じての温度変化は大きいが、年間平均気温12.9℃と大気の乾燥とともに暮らしやすい気候である。

今回発掘調査を実施した上町遺跡Ⅱは、千曲川右岸の中之条地区に位置し、御堂川・前沢川によって形成された複合扇状地の扇央部にあたる。付近はリンゴやブドウ畑が広がっていたが、最近は宅地化が進んでいる地域である。

引用・参考文献　坂城町誌刊行会『坂城町誌　上巻』昭和54年
滝沢公男「更埴市南部の地理的環境と交通」『更埴の自然と歴史』平成３年

第２節　歴史的環境

現在のところ、坂城町において最も古い資料は保地遺跡で、旧石器時代後期の上ヶ屋形彫刻器・小形の尖頭器が数点採取されている。

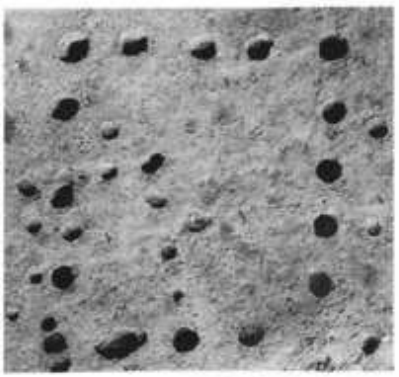
縄文時代―本格的な調査が実施されたのは数例に過ぎず、採集遺物が多い。金井遺跡群で早期と思われる特殊磨石が出土している。込山Ａ・Ｂ遺跡で前期、中期の土器や住居址が確認され、金井遺跡でも中期の勝坂式土器や出尻土偶が採集されている。晩期では保地遺跡（昭和42年調査）で亀ヶ岡系の土器群が出土し、込山Ｅ遺跡からは遮光器土偶の頭部が採集されている。

千曲川の沖積地においては東裏遺跡Ⅱ・青木下遺跡（平成４・５年調査）で中期～晩期にかけての土器・石器が出土し、塚田遺跡Ⅱ（平成５年調査）でも前期～晩期の土器が出土していることから、付近に集落址が存在する可能性が考えられる。

弥生時代―千曲川沖積地の中州と思われる塚田遺跡（平成４年調査）や塚田遺跡Ⅱで後期の集落遺跡が検出された。塚田遺跡Ⅱでは後期後半の箱清水期の集落が複数期にわたっていることが判明している。

古　　代―中之条遺跡群の**寺浦遺跡**（№２－１平成６・７年調査）・**寺浦遺跡Ⅱ**（平成７年調査）・**上町遺跡**（№２－２平成７年調査）・**北浦遺跡**（№２－３）・**宮上遺跡Ⅱ**（№２－５平成５年調査）で古墳時代後期～平安時代前期の集落が展開していることが判明した。寺浦遺跡では大型の掘立柱建物址が検出され、郷家が存在する可能性が考えられる。

東裏遺跡Ⅱでは古墳時代中期末に位置づけられる玉造り工房址３棟検出した。東裏遺跡では中期末に位置づけられる手捏土器や滑石製の剣形模造品・勾玉等が出土していることから、祭祀遺構の存在が予想される。


寺浦遺跡Ｆ14・15号掘立柱建物址

古墳では、千曲川右岸の中之条の御堂川、南条の谷川の河川沿いに後期古墳群が集中し、**御堂川古墳群**(No.11－14)・**谷川古墳群**(No.16)等が形成されている。左岸では出浦沢川・福沢川の支流に後期古墳群が集中し、千曲川水系最大級の石室をもつ御厨社古墳がある。

9世紀初頭になると坂城郷では込山廃寺が建立され、瓦の生産が土井の入窯跡の瓦窯で生産されたことが判明している。この窯址では上田市の信濃国分寺・尼寺、更埴市の正法廃寺の差し瓦が生産されている。他に坂城には須恵器の窯址では**乢岨窯址**(No.17)、垣戸窯址、雷平窯址等がある。

北日名経塚鋳銅製経筒

11世紀末には北日名経塚が築かれ、鋳銅製経筒・和鏡・白磁輪花小皿等が出土し、国立東京博物館に所管されている。保元2年(1157)の銘のある経筒には定西の名が見え、三重県朝熊山経塚・大阪府金剛山経塚の経筒銘にもその名がみえることから、同一人物説が指摘されている。

中世・近世―**開畝製鉄遺跡**(No.19昭和52・53年調査)で、室町時代後期と肯定できる製鉄炉2基検出された。千曲川の砂鉄を原料にしていたこと、地元産の褐鉄鉱を使用していた可能性が考えられることが判明している。城跡では**観音坂城跡**(No.18)があり、土塁の一部が現存する。天正12年(1584)上田城主真田昌幸との攻防戦のため、上杉景勝の将村上景国が拠ったと伝えられるが定かではない。経塚では**社宮神経塚**(No.20)で白銅鏡や永楽通宝、金の小粒多数等が発見されている。

江戸時代になると、坂木・中之条村等14ヶ村が幕府の天領となり、坂木村に坂木代官所が設置されたが、後に中之条村の**中之条代官所**(No.21)に移転した。坂木は北国街道の宿駅として発展し、明治に至って坂城に改正し、今日に至る。

引用・参考文献　坂城町誌刊行会『坂城町誌　中巻』昭和56年
更級埴科地方誌刊行会『更級埴科地方誌　第2巻』昭和53年
宮下健司「経塚と浄土信仰」『図説北信濃の歴史　上巻』平成7年

No.	遺跡名	時代	種別
1	開畝遺跡	弥生～平安	集落址
2	中之条遺跡群	縄文～平安	集落址
2-1	寺浦遺跡	縄文～平安	集落址
2-2	上町遺跡	弥生～平安	集落址
2-3	東町遺跡	弥生～平安	集落址
2-4	北浦遺跡	縄文～平安	集落址
2-5	宮上遺跡	縄文～平安	集落址
3	豊饒堂遺跡	縄文～弥生	集落址
4	金井東遺跡群	縄文～平安	集落址
4-1	酒玉遺跡	縄文～平安	集落址
5	金井西遺跡群	縄文～平安	集落址
5-1	社宮神遺跡	縄文～平安	集落址
6	山崎遺跡	縄文	散布地
7	町横尾遺跡	縄文～平安	散布地
8	入横尾遺跡	平安	散布地
9	御堂川古墳群　山田支群	古墳(後期)	古墳
10	御堂川古墳群　山口支群	古墳(後期)	古墳
11	御堂川古墳群　前山支群	古墳(後期)	古墳
12	御堂川古墳群　山崎支群	古墳(後期)	古墳
13	南条塚穴古墳	古墳(後期)	古墳
14	谷川古墳群	古墳(後期)	古墳
15	谷川古墳群　上原支群	古墳(後期)	古墳
16	北畑古墳	古墳(後期)	古墳
17	乢岨窯跡	平安	窯跡
18	観音坂城跡	中世	城館跡
19	開畝製鉄遺跡	中世	製鉄跡
20	社宮神経塚	中世	経塚
21	中之条代官所跡	近世	屋敷跡

第6図　上町遺跡Ⅱ周辺遺跡分布図（1：12,500）

第Ⅲ章　上町遺跡

第1節　調査概要

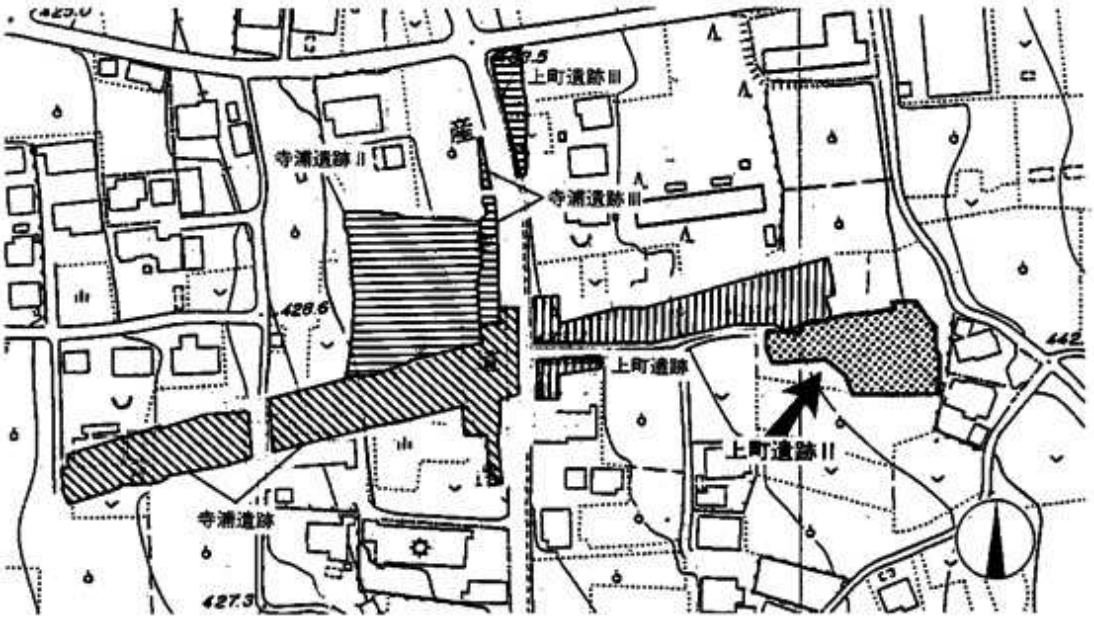
1　遺跡の立地と概要

中之条遺跡群上町遺跡Ⅱは標高439ｍ内外を測る。御堂川・前沢川によって形成された複合扇状地の扇央部にあたる。江戸時代後期に作成された『中之条村御林絵図』(格致学校歴史民俗資料館所蔵)を見ると当遺跡一帯は畑となっているが、現在宅地化が進んでいる。

平成元年に作成された『坂城町遺跡分布図』によると弥生～平安時代の集落遺跡に位置づけられ、当遺跡北側で隣接する**上町遺跡**(平成６年調査)・**上町遺跡Ⅲ**(平成７年調査)で古墳後期～平安時代前期の竪穴住居址・掘立柱建物址等が検出された。西側は道路を挟んで**寺浦遺跡**(平成５～７年調査)・**寺浦遺跡Ⅱ**（平成６年調査）・**寺浦遺跡Ⅲ**(平成６年調査)となり、古墳時代後期～平安時代前期の竪穴住居址・掘立柱建物址等が検出されたことから、遺跡名で分けられてはいるが同一の集落址が展開していると考えられる。本遺跡付近が集落の上限にあたると考えられ、上町の地名もこれに由来するものかも知れない。

調査区の調査面積及び検出された遺構の概要は以下のとおりである。

調査面積　1,116㎡。



第７図　上町遺跡Ⅱ周辺図（１：2,500）

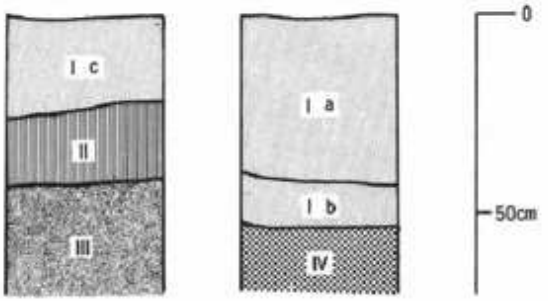
遺構　竪穴住居址－２棟(奈良・平安２)・掘立柱建物址－１棟(中世？)・土坑－９基・ピット－36基

遺物　縄文土器　土師器　須恵器　石器

2　基本層序

上町遺跡Ⅱの基本層序は第８図に示したとおりである。

Ⅰａ層　黄褐色土（10Ｙ Ｒ5/6）盛土
Ⅰｂ層　黒褐色土（7.5Ｙ Ｒ3/2）攪乱層
Ⅰｃ層　褐色土（10Ｙ Ｒ4/6）耕作土
Ⅱ層　暗褐色土（10Ｙ Ｒ3/4）
直径５mm～１cm位の礫を含む
Ⅲ層　黄褐色土（10Ｙ Ｒ5/8）
遺構検出面
Ⅳ層　褐色土（7.5Ｙ Ｒ4/3）
縄文包含層



第８図　基本層序模式図（1：20）

3　調査日誌

平成６年11月16日（水）　重機による表土除去。

18日（金）　表土除去終了。プレハブ設置。

28日（月）　開始式を行う。調査開始。Ｈ１号住居址調査。

30日（水）　Ｈ２号住居址掘り下げ始める。

12月１日（木）　Ｆ１号掘立柱建物調査。Ｈ２号住居址カマドを掘り下げる。

12日（月）　Ｈ２号住居址掘り方調査。縄文包含層掘り下げ遺構確認されず。土坑・ピット調査。

20日（火）　遺構調査終了。

22日（木）　発掘調査完了。

平成８年２月～３月　整理作業。

表土除去作業

住居址検出作業

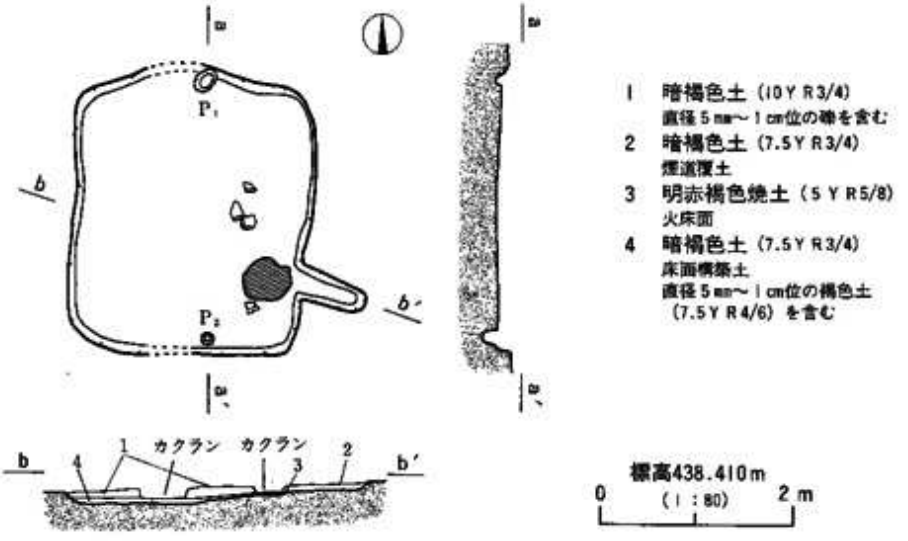
第2節　遺構と遺物

1　竪穴住居址

1）Ｈ１号住居址(第９図)

検出位置－Ｌく８、く９グリッド。

南北壁中央部を攪乱によって破壊されている。長軸2.40ｍ、短軸2.34ｍの隅丸方形を呈する。北壁長は2.2ｍ、東壁長は2.5ｍ、南壁長は2.8ｍ、西壁長は2.46ｍで、南北主軸はＮ－103°－Ｅを指す。壁残高は３～15cmを測る。床は平坦だがカマド周辺部以外軟弱である。ピットは南北壁中央部付近から２基検出された。カマドは東壁の中央部に位置し、煙道部が長く張り出す。遺存状態は悪く、火床面のみの検出で付近には構築石材が散在していた。遺物は土師器長胴甕・須恵器坏が、カマド付近の床面から検出したが、小片で図示できるものはない。時期は須恵器が底部ヘラ切りであることから奈良時代に位置づけたい。

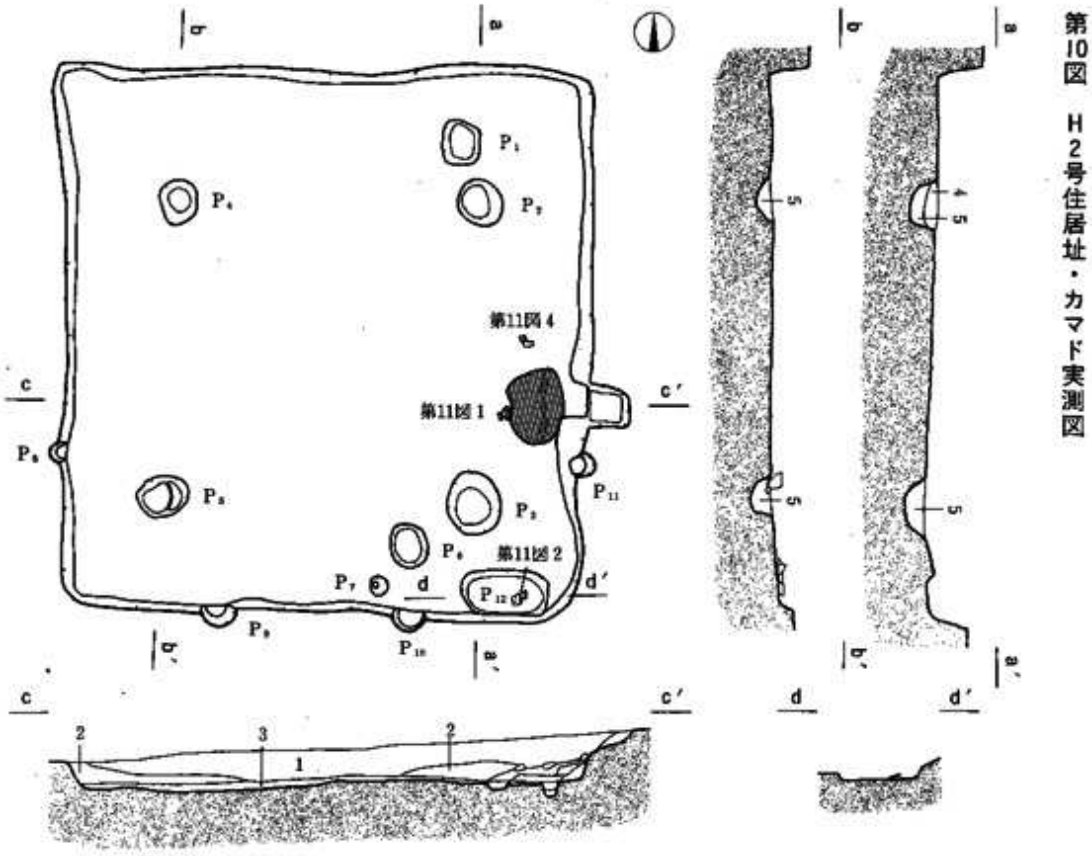


第９図　Ｈ１号住居址実測図

2）Ｈ２号住居址(第10図)

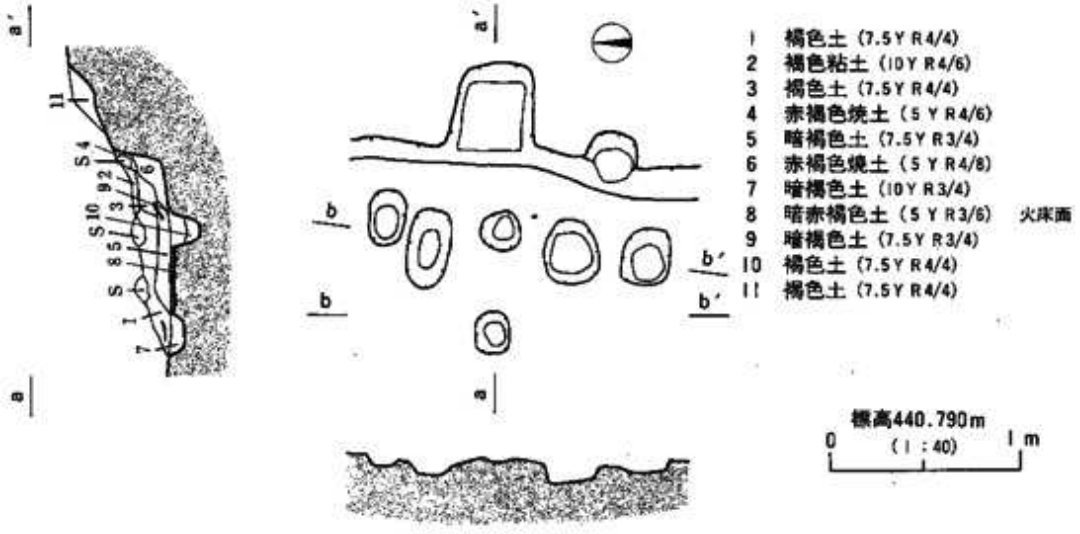
検出位置－Ｌう８、う９、え８、え９グリッド。

Ｄ７号土坑址を切り構築。１・２号ピットに一部壁を切られる。長軸5.36ｍ、短軸5.24ｍの隅丸長方形を呈する。北壁長は5.32ｍ、東壁長は5.12ｍ、南壁長は5.8ｍ、西壁長は5,32ｍで、南北主軸はＮ－97°－Ｅを指す。壁残高は20～28cmを測る。床は平坦で全面貼床で堅固である。ピットは８基検出された。このうちＰ２～５が主柱穴で深さはＰ１が13～23cm、Ｐ２が15～22cm、Ｐ３



1 褐色土 (7.5Y R4/4) 直径5mm～30cm位の礫を多量に含む
2 暗褐色土 (7.5Y R3/4) 直径10cm～30cm位の礫を多量に含む
3 褐色土 (7.5Y R4/4) 直径微～5mm位の黄褐色土 (10Y R5/4) を含む 床面構築土
4 暗褐色土 (7.5Y R3/4) 直径5mm～1cm位の礫を少量含む
5 褐色土 (7.5Y R4/4) 直径5mm～1cm位の礫を含む

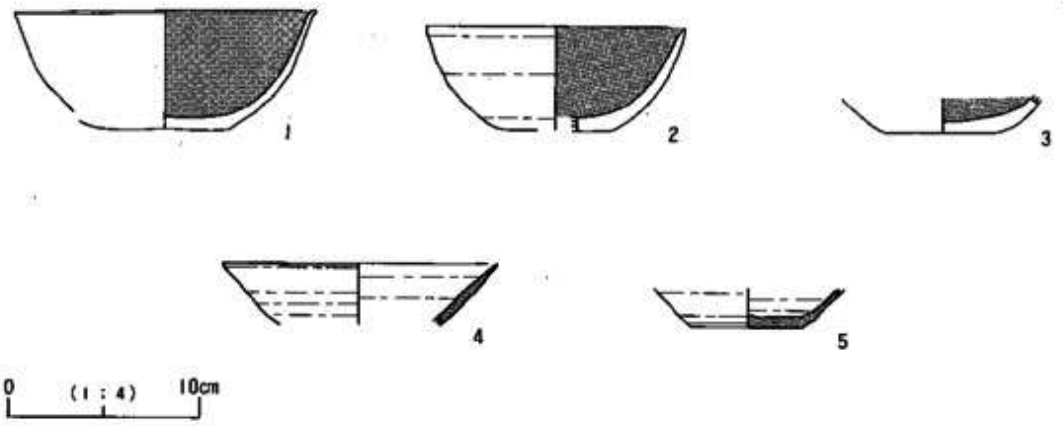
標高440.790m
0 (1:80) 2m



1 褐色土 (7.5Y R4/4)
2 褐色粘土 (10Y R4/6)
3 褐色土 (7.5Y R4/4)
4 赤褐色焼土 (5Y R4/6)
5 暗褐色土 (7.5Y R3/4)
6 赤褐色焼土 (5Y R4/8)
7 暗褐色土 (10Y R3/4)
8 暗赤褐色土 (5Y R3/6) 火床面
9 暗褐色土 (7.5Y R3/4)
10 褐色土 (7.5Y R4/4)
11 褐色土 (7.5Y R4/4)

標高440.790m
0 (1:40) 1m

第10図 H2号住居址・カマド実測図



第11図　Ｈ２号住居址出土遺物実測図

が８～13cm、Ｐ４が13～17cmを測る。Ｐ8～11は垂木の可能性が考えられる。Ｐ12は貯蔵穴と思われ、廃絶時にカマドの袖石、支石、土師器を破棄したらしい。カマドは東壁中央部よりやや南側に位置し、煙道部が張り出す。遺存状態が悪く、火床面のみの検出であった。付近には構築石材が散在し、掘り方で袖石跡も検出されたことから、粘土と自然石によって構築されていたと思われる。遺物は土師器・黒色土器・須恵器が出土したが、床面からの出土はカマド周辺部のみで、覆土中からは、小片で摩耗をうけた土器がほとんどである。住居廃絶時に自然石を投棄しているらしく、中央部付近に集中していた。用途は不明である。図示できた土器は５点のみで、黒色土器坏(第11図１～３)はロクロ調整されているものの摩滅し、切り離しは不明である。須恵器坏(第11図４・５)も出土している。第11図５も黒色土器と同様に切り離しの技法は不明である。

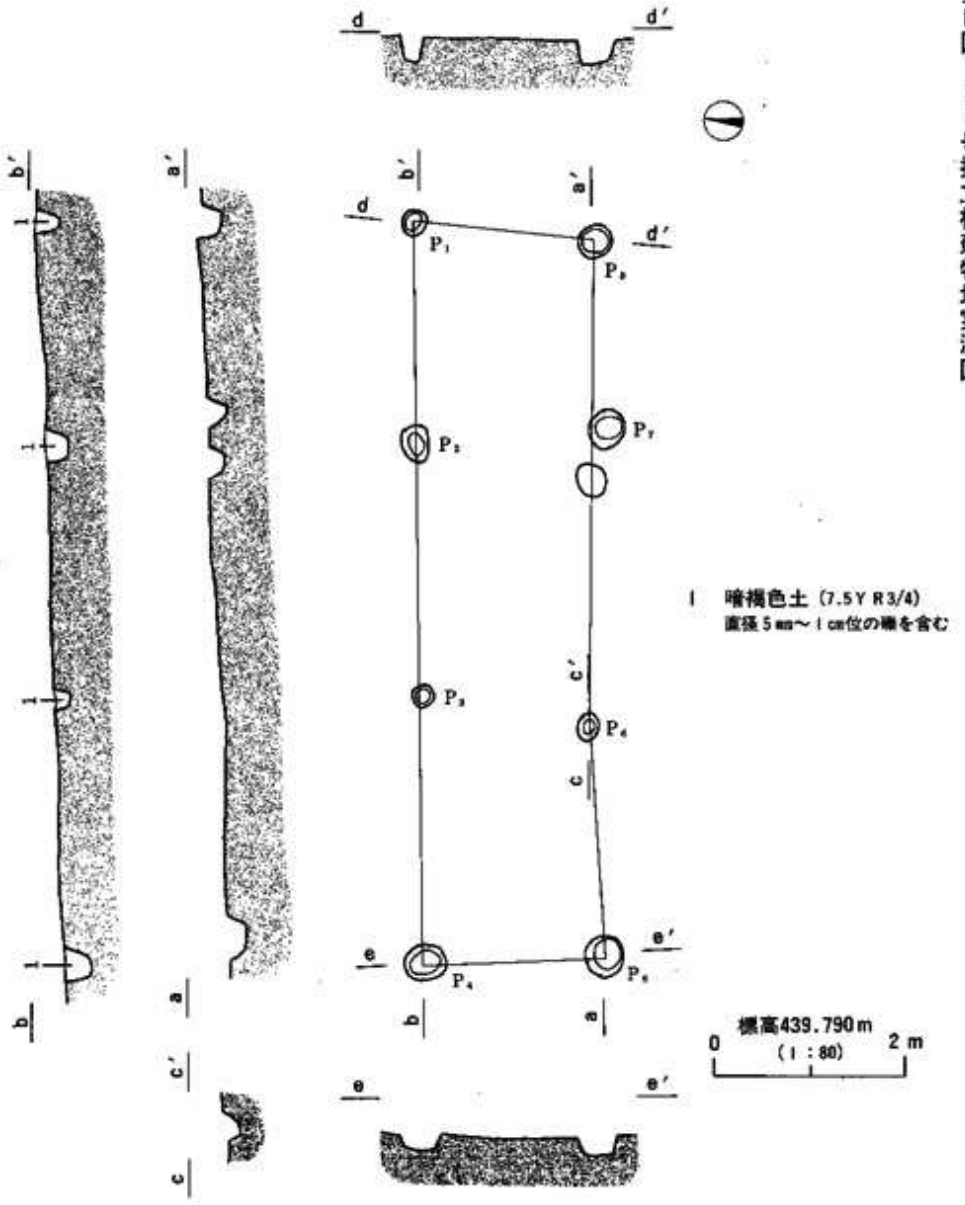
時期は出土遺物から奈良時代末～平安時代初頭（８世紀末～９世紀初頭）に位置づけられる。

2　掘立柱建物址

１）Ｆ１号掘立柱建物址(第12図)

検出位置－Ｈこ２、こ３、Ｍあ２、あ３グリッド。

建物主軸はＮ－20°－Ｗを指す。長辺3.74ｍ、短辺90cmで、３間×１間の側柱の建物である。各柱穴は平均37×38cmの円形を呈し、深さは51～63cmを測る。遺物はＰ５から黒耀石製の石鏃(第18図１)が出土したが、流れ込みと考えられる。時期は不明であるが、中世に位置づけたい。



第12図　F1号掘立柱建物址実測図

3　土坑址

1）D1号土坑址(第13図)

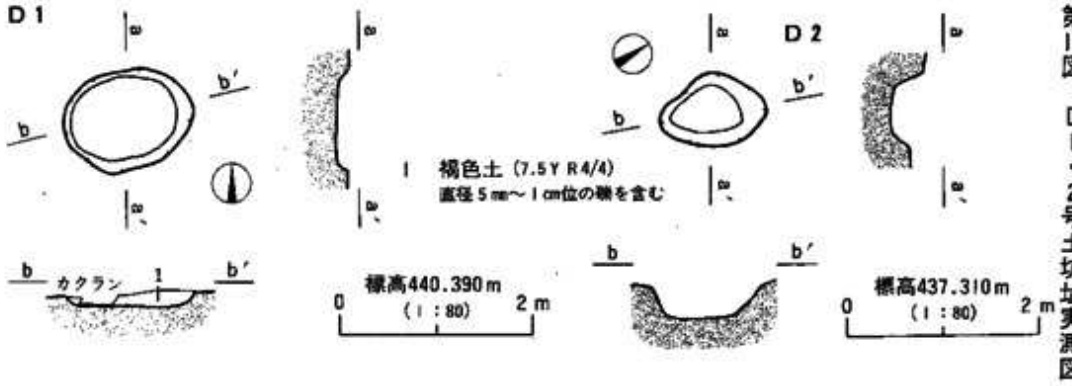
検出位置－Gこ8グリッド。

長軸1.38m、短軸1.06mの円形。深さ15cm。

2）D2号土坑址(第13図)

検出位置－Lく9グリッド。

長軸1m、短軸72cmの楕円形。深さ35cm。



第13図 D1・2号土坑址実測図

3） D 3 号土坑址(第14図)

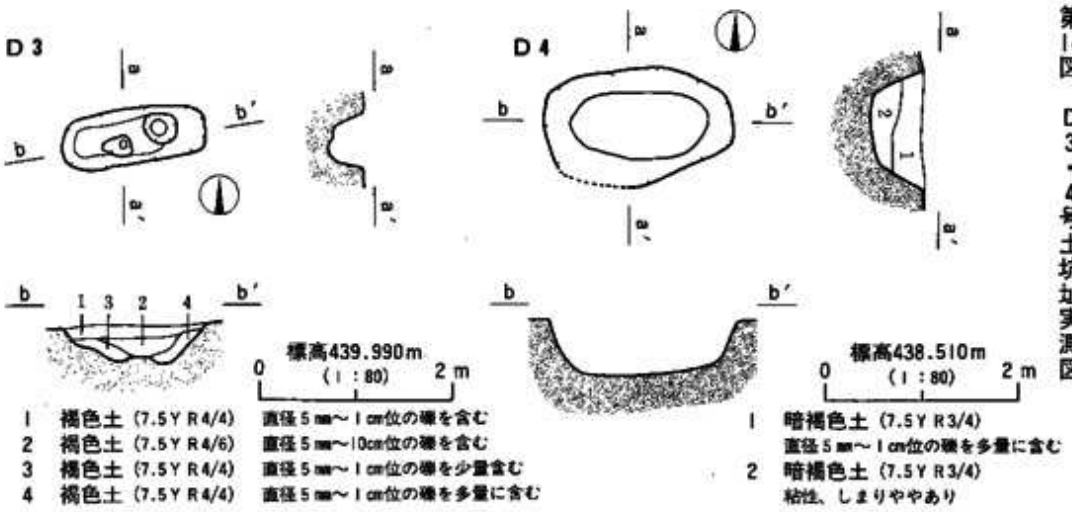
検出位置－Mえ１グリッド。

長軸1.5m、短軸60cmの長方形。深さ36cm。

4） D 4 号土坑址(第14図)

検出位置－Lき10グリッド。

長軸1.96m、短軸1.24mの楕円形。深さ59.5cm。



第14図 D3・4号土坑址実測図

5） D 5 号土坑址(第15図)

検出位置－Mあ３、い３グリッド。

南側が調査区外になるため、全容は把握できなかったが、長軸は1.12mで楕円形を呈すると思われる。深さ34.5cm。

6） D 6 号土坑址(第15図)

検出位置－Mう１グリッド。

北側上層を30号ピットに切られる。長軸1.20m、短軸92cmの楕円形。深さ22.5cm。

7） D 7 号土坑址(第15図)

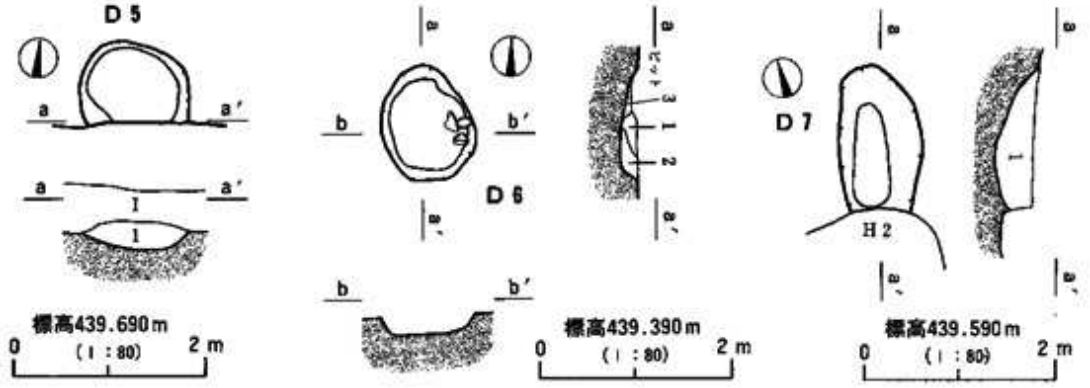
検出位置－Lお10グリッド。

長軸2.68m、短軸1.64mの楕円形。深さ70cm。

8） D 8 号土坑址(第16図)

検出位置－Lえ７、え８、お８グリッド。

長軸2.32m、短軸1.68mの不整楕円形。深さ32cm。



1 褐色土（7.5Y R4/4）直径5mm～10cm位の礫を含む

1 褐色土（10Y R4/4）直径微～5mm位の炭化物を含む
2 褐色土（7.5Y R4/4）直径5mm～1cm位の礫を含む
3 褐色土（7.5Y R4/3）粘性、しまりあり

1 褐色土（7.5Y R4/4）直径5mm～1cm位の黄褐色土（10Y R5/6）を含む

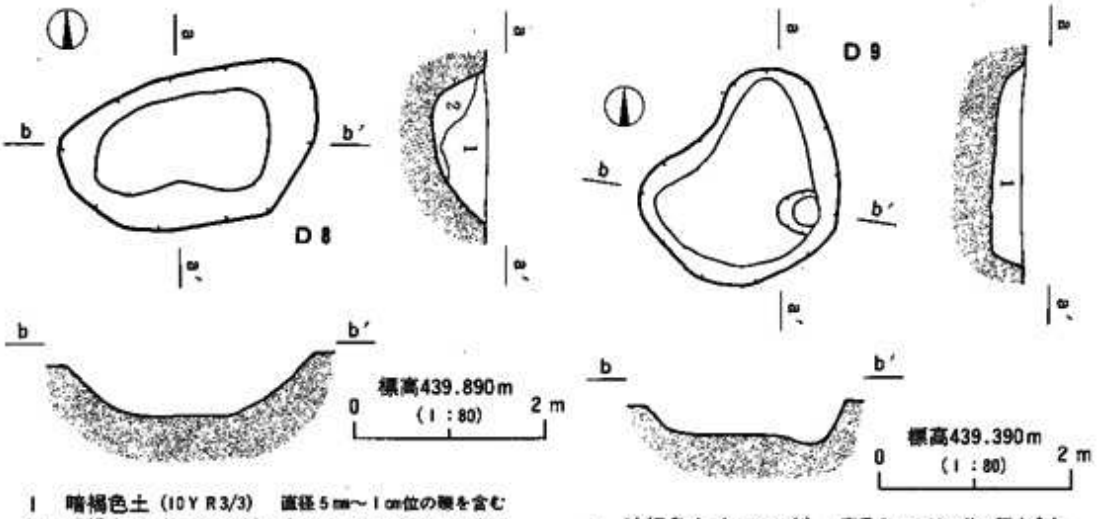
第15図　D5・6・7号土坑址実測図

9）D9号土坑址（第16図）

検出位置－Lい9、う9グリッド。

西側を短軸84cmの楕円形。深さ48.5cm。

D2・6・9号土坑址は住居・ピットとの切り合い関係から奈良時代以前の構築であるが用途は不明である。他の土坑も時期は判然としない。



1 暗褐色土（10Y R3/3）直径5mm～1cm位の礫を含む
2 暗褐色土（7.5Y R3/4）直径5mm～1cm位の礫を含む

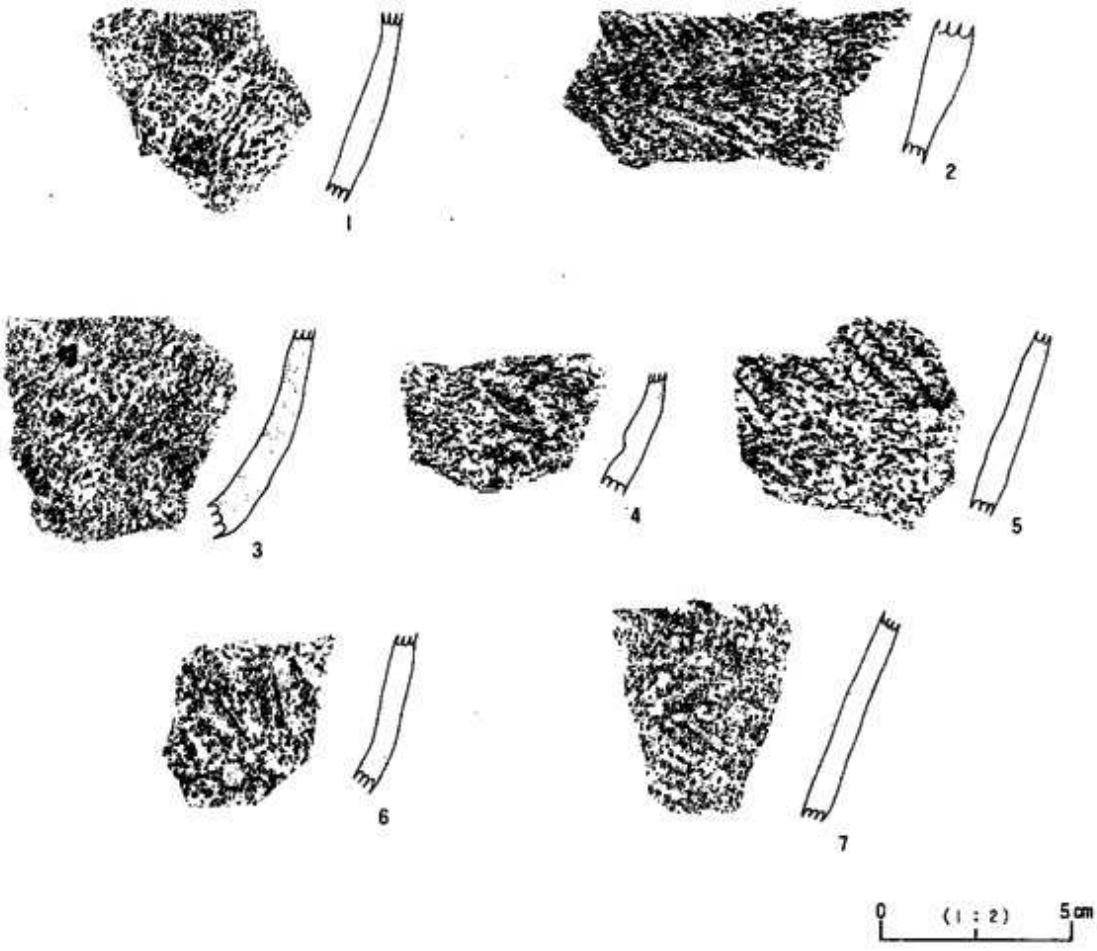
1 暗褐色土（10Y R3/4）直径5mm～10cm位の礫を含む

第16図　D8・9号土坑址実測図

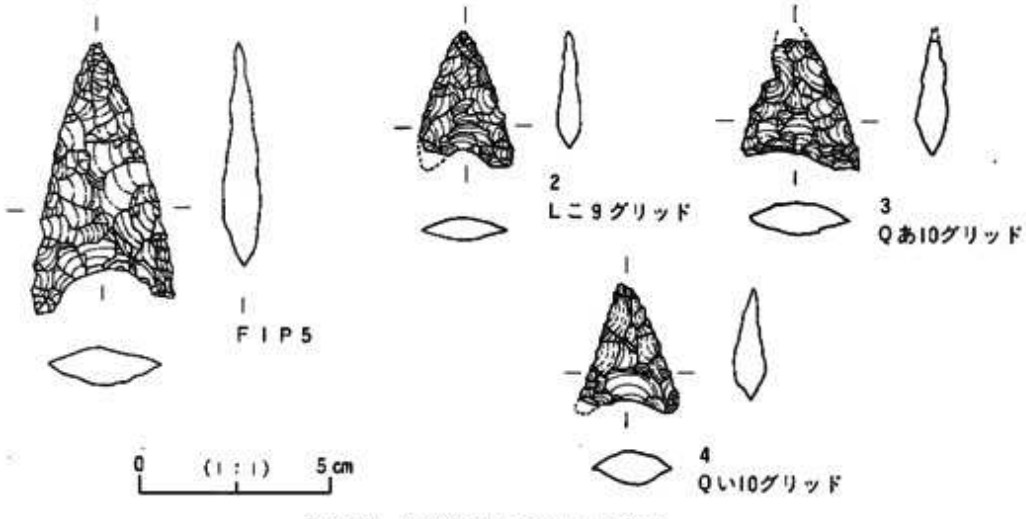
4　遺構外出土遺物

1）縄文土器（第17図）

Lけ10、こ9、こ10グリッドに集中して出土したが、遺構は検出されたため、遺構外出土遺物として扱う。胎土は黒耀石・白色鉱物を含む。1・2は、繊維を含む。5には縄文が施される。



第17図　遺構外出土遺物実測図

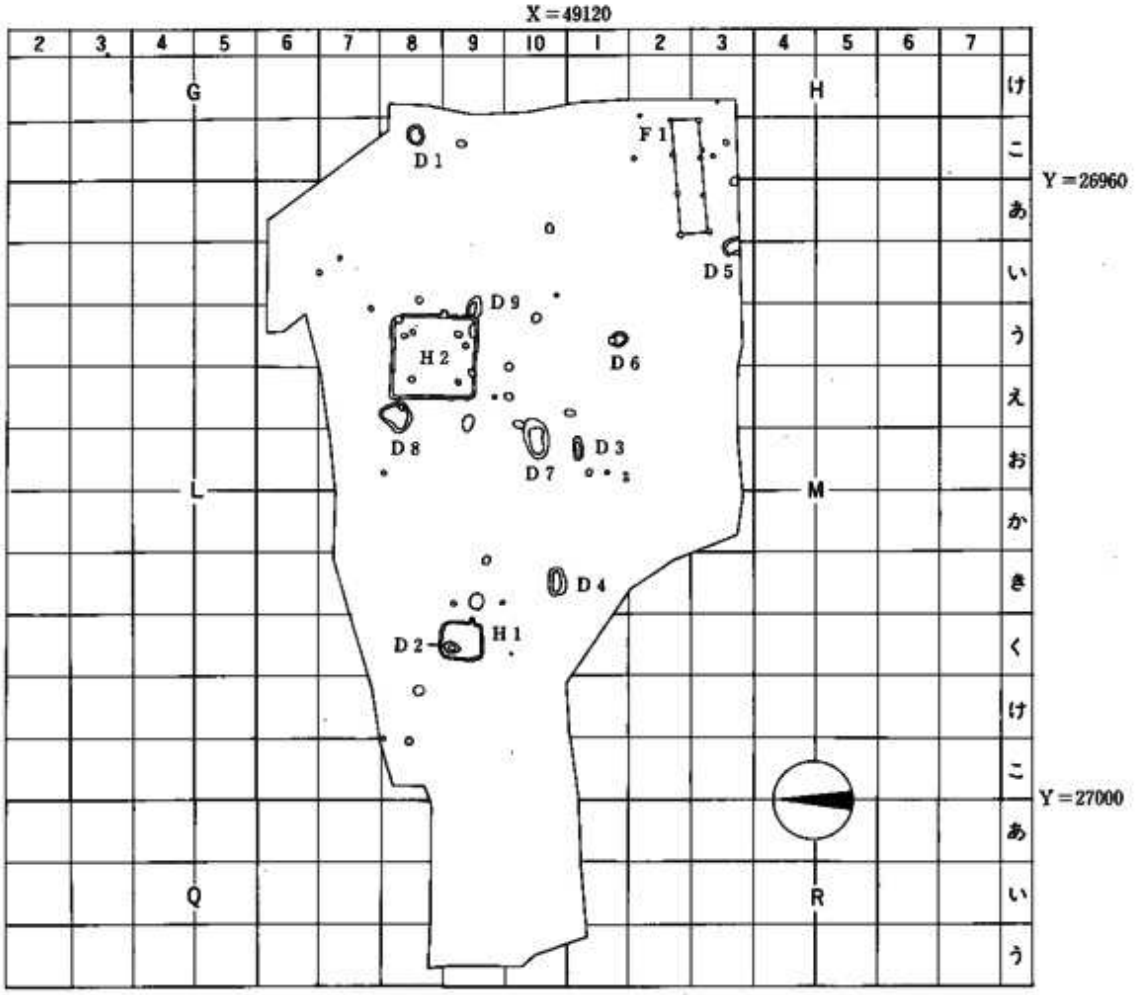


第18図　遺構外出土石器実測図

時期は縄文時代前期に位置づけたい。

2）石　　器（第18図）

1はＦ１号掘立柱建物址Ｐ５から覆土から出土、２～４はグリッド遺物として取り上げた黒曜石製で、凹基無茎鏃の石鏃である。２～４は縄文土器出土範囲周辺部からの出土である。遺構が展開するのは調査区外にあたる南側ではないかと推測される。



第19図　上町遺跡Ⅱ遺構配置図（1：500）

第3節　写真図版

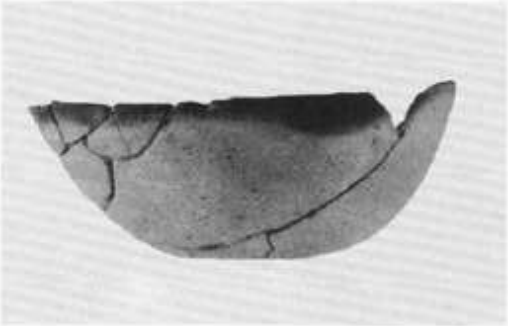
調査区全景（北東より撮影）

Ｈ１号住居址（西より撮影）

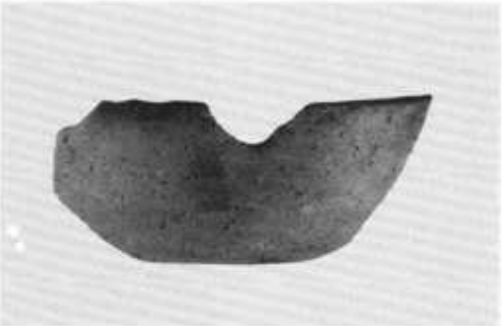
Ｈ２号住居址（西より撮影）

Ｈ２号住居址カマド（西より撮影）

Ｈ２号住居址カマド掘り方（西より撮影）



H 2 号住居址第11図 1



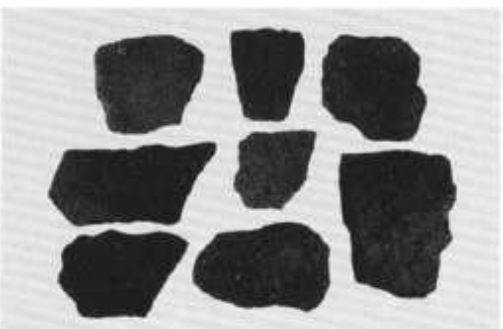
H 2 号住居址第11図 2

H 2 号住居址第11図 3

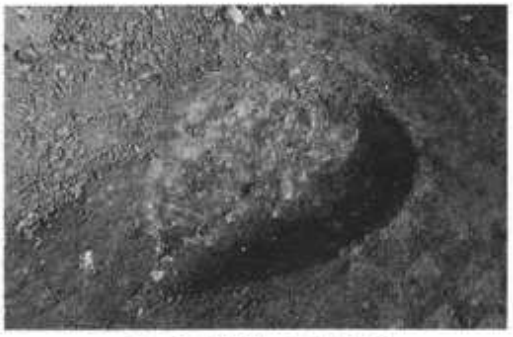
H 2 号住居址第11図 5

F 1 号掘立柱建物址（西より撮影）

F 1 号掘立柱建物址第18図 1



遺構外出土遺物

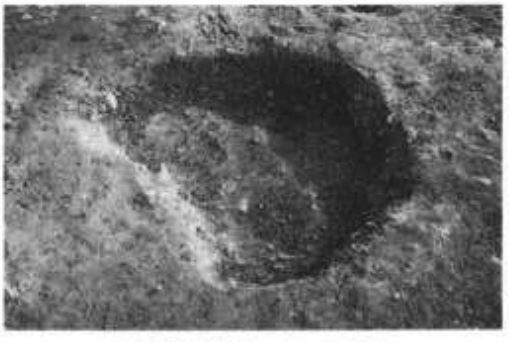


D 1 号土坑址（北より撮影）

D 4 号土坑址（北より撮影）

D 5 号土坑址（北より撮影）

D 8 号土坑址（北より撮影）



D 9 号土坑址（北より撮影）

遺構外出土遺物　眼鏡

第Ⅳ章　成果と課題

第1節　縄文時代

遺構は今回検出されなかったが、かなり限定した範囲で土器が出土している。グリッド範囲でLけ10、こ9、こ10に集中し、縄文包含層Ⅳ層もこの範囲でしか見当たらず、調査区外の南側に堆積していることから自然地形の落ち込みに堆積したと考えられる。土器も小片で非常にもろい。隣接する上町遺跡で前期のD21号土坑址が検出されていることから、周辺に集落址が展開するのか今後の調査の課題である。

第2節　古　　代

竪穴住居2棟のみの検出であったが、保存状態は2棟共悪い。H2号住居址覆土内には拳大～人頭大の自然礫が多量に出土している。これはH2号住居址のみで見られる傾向でなく、上町遺跡ⅢH2号住居址、寺浦遺跡ⅡH2号住居址、中之条遺跡群H1号住居址等でも見られる。また貯蔵穴にもカマドの袖石や支脚石を破棄している。自然礫も半壊した石と完形の石に区別することができる。時期は古墳時代後期～奈良時代が主体のようである。住居廃絶の過程でなんらかの信仰にもとづくものなのか判然としないが、今後の課題としたい。

引用・参考文献　助川朋広『中之条遺跡群寺浦遺跡Ⅱ』平成8年
小平光一『豊穣堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』平成8年

H2号住居址礫出土状況（西より撮影）

上町遺跡II発掘調査体制

【事務局】

教育長　西沢　民雄

社会教育課長　塩野入　猛

文化財係長　山崎　政弘（平成7年3月31日退任）

小宮山久春（平成7年4月1日着任）

文化財係　助川　朋広

小平　光一

青木　卓（嘱託職員）

瀬在　孝子（臨時職員）

【発掘調査】

調査指導者　森嶋　稔（日本考古学協会員・長野県考古学会長・千曲川水系古代文化研究所主幹）

調査担当者　小平　光一（坂城町教育委員会学芸員）

協力者　天田　澄子　塩野入早苗　春原かずい

高木　和子（以上、臨時職員）

青木　清　池田てる子　石井　和美

臼井　かね　栗林　初恵　小林さよ子

島谷　久　諏訪　孝雄　田中　勤

中島　金子　中村　静江　中村　客民

三井　重子　宮入　梅子　矢島岩太郎

柳沢　勲夫　山崎　貞子　山辺ケサエ

山辺　春男（以上、更埴地域シルバー人材センター）

坂城町埋蔵文化財発掘調査報告書

	『開畝製鉄遺跡—第1次調査報告書』	1977
	『開畝製鉄遺跡—第2次調査報告書』	1978
	『東裏遺跡』	1984
	『中之条遺跡群　宮上遺跡II』（概報）	1993
	『南条遺跡群　塚田遺跡』	1993
第1集	『南条遺跡群　東裏遺跡II・青木下遺跡』	1994
第2集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1994
第3集	『町内遺跡発掘調査報告書』	1995
第4集	『南条遺跡群　塚田遺跡II』	1995
第5集	『豊饒堂遺跡・上町遺跡・寺浦遺跡・東町遺跡』	1996
第6集	『中之条遺跡群　寺浦遺跡II』	1996
第7集	『中之条遺跡群　上町遺跡II』	1996

発行日　1996年3月29日
編集者　坂城町教育委員会
発行者　坂城町教育委員会
〒389－06　長野県埴科郡坂城町大字中之条2468番地　☎0268－82－2069
印刷者　鬼灯書籍株式会社
〒381　長野県長野市柳原2133－5　☎026－244－0235
印刷仕様◇版型　B5版◇頁数　28頁◇版組　電子組版◇製版　モノクロ写真150線
◇用紙　表紙レザック180kg　本文コート紙90kg◇製本　糸かがり

報告書抄録

ふりがな	なかのじょういせきぐん　うわまちいせき
書名	中之条遺跡群　上町遺跡II
副書名	長野県埴科郡坂城町住宅団地造成事業発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	坂城町埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第7集
編著者名	小平　光一
編集機関	坂城町教育委員会
所在地	〒389－06　長野県埴科郡坂城町大字中之条2468番地　TEL（0268）82－2069
発行年月日	1996年3月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
上町遺跡II	長野県埴科郡坂城町大字中之条	1521		36度26分30秒	138度11分35秒	1994年11月16日～12月22日	1,116	住宅団地造成に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上町II	集落址	縄文(前期) 奈良 平安	竪穴住居址　2棟 (奈良・平安) 掘立柱建物址1棟 (中世？) 土坑　9基	縄文土器(前期) 石鏃 土師器 須恵器	